自動詞場所格交替に生じる動詞の日英比較

森 川 文 弘

1．序論

英語には場所格交替と呼ばれる現象がある。これは同一の動詞が2通りの構文に出現できるというもので、1つ目の構文では場所を表す副詞句に出現する要素が2つ目の構文では主語または目的語の位置に「格上げ」され、同時に1つ目の構文では主語または目的語であった要素が2つ目の構文では *with* を伴う斜格句に「格下げ」されるという現象である。

(1) a. Bees are swarming in the garden.
　　b. The garden is swarming with bees.
(2) a. Jack sprayed paint onto the wall.
　　b. Jack sprayed the wall with paint.

(1) が自動詞、(2) が他動詞の例である。(1a) の場所句に現れる *the garden* が (1b) では主語になっており、(1a) の主語である *bees* が (1b) では *with* 句に現れている。また (2a) では場所句にある *the wall* が (2b) では目的語になり、(2a) では目的語である *paint* が (2b) では *with* 句で表現されている。

本論文ではその中でも自動詞の交替を扱う。日本語にも同様の現象があるが、英語で交替する文をそのまま日本語に訳すと、場所を主語にした文が不適格になる場合が多い。

(3) a. 車が道路で渋滞している。
　　b. 道路が車で渋滞している。
(4) a. 蜜蜂が庭に {群がっている／集まっている／たかっている／密集している}。
　　b. *庭が蜜蜂で {群がっている／集まっている／たかっている／密集している}。

(3) は日本語でも場所格交替が可能なことを示す例である。しかし (1) の

日本語訳である（4）については、場所格を使用する（4a）は可能であるが、場所を主語にした（4b）は容認不可能である。

本論文では、認知言語学の立場から、日英語の自動詞場所格交替に生じる動詞を比較する。2節で従来の自動詞場所格交替の分析を概観し、3節でTalmy（2000）の類型論を紹介した後、その観点から日英語の相違について考察する。

2．自動詞場所格交替の分析

2.1. Salkoff（1983）、Levin（1993）

Salkoff（1983）は英語の場所格交替に出現する動詞を約350挙げて分析を行っている。そのすべての動詞に共通する特徴を見出すことはできないものの、ある種の動詞群はこの交替現象に生産的に出現できると指摘している。

(5) a. Verbs of dancing: *dance, waltz, tango, polka, skip, jig, romp, caper, curvet...*

b. Verbs of light emission: *flash, glow, glitter, gleam, sparkle, ...*

c. Verbs of sound emission: *echo, sound, resound, ring, blare, ...*

d. Verbs of jumping: *hop, jump, leap, bound, skip, spring, caper, ...*

e. Verbs of running: *run, race, trip, speed, gallop, scoot, trot, ...*

f. Verbs expressing the notion of large number: *abound, brim over, burst, be dense, overflow, be populous, pullulate, be rampant, be rife, swarm, teem, be thick, be populous ...*

Levin（1993）もこの交替に出現する動詞を約180挙げ、同様に分類を行っている。「光の発生を表す動詞」「音の発生を表す動詞」はSalkoff（1983）と同様だが、「物質の噴出を表す動詞」が加わり、また各種の「存在のあり方を表す動詞」という概念によっていくつかの動詞が独自の分類に再編されている。

(6) a. Verbs of light emission: *beam, blink, burn, blaze, flame, flare, flash, flicker, glare, ...*

b. Verbs of sound emission: *babble, bang, beat, beep, bellow, blare, blast, blat, boom, ...*

c. Verbs of substance emission: *drip, foam, gush, ooze, radiate, spout, sprout, squirt, ...*

d. Verbs of sound existence: *'din, echo, resonate, resound, reverberate, sound*
e. Verbs expressing entity-specific modes of being: *bloom, blossom, bristle, foam, sprout*
f. Verbs expressing modes of being involving motion: *dance, flutter, pulsate, quiver, ...*
g. Swarm verbs: *abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim, teem, throng*

例えば *dance* という動詞は、(7) のような通常の「踊る」という意味ではこの交替には使用できず、(8) のように「まるで踊っているような様子である」というメタファー的な事態描写に限定されるため、この分析は卓見と言える。

(7) a. Flies danced among the flowers.
b. *The flowers danced with flies. (Salkoff 1983: 318)
(8) a. Enthusiasm danced in his eyes.
b. His eyes danced with enthusiasm. (ibid.)

2.2. Langacker (1991, 2002)

Langacker (1991, 2002) は、両者の構文は同様の意味内容を持つが、Figure/Ground の選択が異なると分析している。

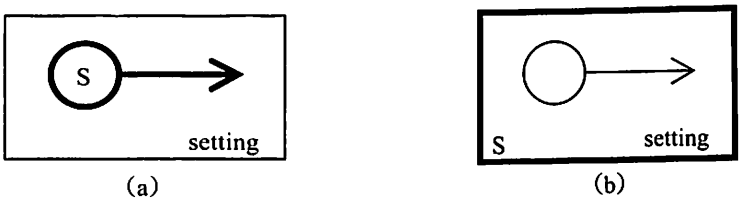

図 1．場所格交替の事態認知モデル (Langacker 2002: 232改変)

図 1 (a)(b) はいずれも、ある場所 (長方形) にある存在物 (円) があり、そこである行為 (矢印) を行っているという状況をベースにしている。しかし (a) では存在物が注目の対象つまり Figure (太線) となって主語 S に選択されているのに対し、(b) では場所全体が注目されて Figure となり主語 S に選択されている。この分析は交替現象をうまく説明しているものの、どのような場

合に交替が可能でどのような場合には不可能なのかを判断する材料は与えてくれないため、さらなる詳細な分析が必要である。

2.3. Morikawa (2001)

Morikawa (2001) は場所格交替を一種のメトニミーであると分析し、参照点構造の成立する条件を元に、(i) 存在物の動作主性が低い、(ii) 存在物が場所全体に溢れている、という条件を満たした場合に相対的に「場所」の認知的際立ちが高くなり、主語に選択できると論じた。

(a) (b)

図2．場所格交替の事態認知モデル（Morikawa 2001: 156 改変）

Fillmore (1968)、S. Anderson (1971)、J. Anderson (1977)、Salkoff (1983)、Levin (1993)、Dowty (2000) など多くの研究者が指摘しているように、場所格を使う文は存在物がこの場所内の一部分のみに存在していても成立するのに対し、*with* 句を使う文は存在物がこの場所全体に広がっている状況を表す。図2 (a) の状況では存在物を Figure、この出来事を存在物の行為と解釈するのが自然であるのに対し、(b) の状況では存在物が場所全体と一体化し、本来存在物の行為を表している動詞が場所全体の状態を描写しているものと錯覚されるため、場所と動詞がメトニミー的に結びつくことが可能になる。

2.4. Pinker (2007)

Pinker (2007) は他動詞の場所格交替を例に挙げ、構文の意味と動詞の意味の相性が文の容認性を決めると論じている。

(9) a. Amy poured water into the glass.
　　b. *Amy poured the glass with water. (Pinker 2007: 36)

(10) a. *Bobby filled water into the glass.
　　b. Bobby filled the glass with water. (ibid.)

(11) a. Hal loaded hay into the wagon.
b. Hal loaded the wagon with hay. (Pinker 2007: 35)

彼によると、*pour* という動詞は「物体の移動」に焦点を当て、*fill* という動詞は「容器の状態変化」に焦点を当てたものなので、それぞれの意味に合う構文で使用された（9a)(10b）は可能であるが、その意味に合わない構文に現れた（9b)(10a）は容認されない。そして *load* は「物体の移動」と「容器の状態変化」の両方を同時に意味の焦点にしているので、(11a)(11b）の両方の構文に出現できると論じている。その一方で、自動詞の場所格交替については、Morikawa（2001）と同様の錯覚が起こると述べている。

(12) a. Bees are swarming in the garden.
b. The garden is swarming with bees. (=1)
(13) a. Juice dripped from the peach.
b. The peach was dripping with juice. (Pinker 2007: 46)
(14) a. Ants crawled over the gingerbread.
b. The gingerbread was crawling with ants. (ibid.)

彼は、(12b)(13b)(14b）の文では対象が存在物で埋め尽くされているという感覚的なイメージを提示しているため、読み手の心の中では対象と存在物の区別がぼやけてしまい、通常はその存在物がする動作（*swarm*、*drip*、*crawl* など）をあたかも対象全体がしているかのような感覚になると論じている。しかし同様の混乱が（9b)(10a）で起きないのはなぜなのか、説明はない。これらは他動詞であるため別の参与者が関与してくることが関係しているのかもしれない。しかしこの議論は、日本語の同様の構文で深刻な問題を生じる。

2.5. 日本語の場所格交替の非生産性

もし場所格交替を起こす動詞が2.2～2.4節で見たような意味的あるいは状況的特徴で定義できるなら、おそらく英語以外の言語でもそれに相当するような交替現象が起きるものと予測される。実際、日本語にも同様の場所格交替現象が存在する。

(15) a. 涙が目ににじんでいる。
b. 目が涙でにじんでいる。 (山梨 2004: 157)

(16) a. 月の光が湖面に輝いている。
b. 湖面が月の光で輝いている。 (山梨 2004: 158)

しかし話はそう単純ではない。英語の場所格交替の文に対応するような日本語の文を考えても、そのまま交替文として通用するとは限らない。

(17) a. 果汁が桃から {したたった／こぼれた／垂れた／染み出した}。
b. *桃が果汁で {したたった／こぼれた／垂れた／染み出した}。
(18) a. 蟻がジンジャーブレッドの上を {這い回った／もぞもぞ動いた}。
b. *ジンジャーブレッドが蟻で {這い回った／もぞもぞ動いた}。

(17)(18) の文は英語の (13)(14) の交替現象に相当する日本語の文であるが、場所句を用いた (17a)(18a) は問題なく成立するのに対し、場所を主語にした (17b)(18b) は容認不可能である。これら両方の構文を成立させることができる自動詞は日本語にはそれほど多くない。(5)(6) に倣って列挙するなら (19) のようになるだろう。[*1]

(19)a. 光の発生を表す動詞：光る、輝く
b. 物質の存在を表す動詞で交替するもの：満ちる、一杯になる／である、溢れる、つかえる、詰まる、渋滞する、散らかる、にじむ

Morikawa (2001) や Pinker (2007) の議論では、存在物が多数集まることによって、*swarm*、*drip*、*crawl* など本来は存在物の動作を、まるで場所全体がしているような錯覚に陥るということであった。しかし日本語では、その場所全体が「群がる」「したたる」「這い回る」ようにはどうしても感じられない。これらの動詞は明らかに「存在物の動き」に焦点を当てており、「場所全体の状態」を表すことはできないのである。英語で生じる錯覚が、なぜ日本語では生じないのだろうか。

3. 考察

3.1. Talmy (2000) の言語類型論

Talmy (2000) は、移動を表す文において、その事態の枠組みを表す「経路」が文中のどの要素で表現される傾向が強いかによって、「動詞枠づけ言語

(verb-framed languages)」「衛星枠づけ言語 (satellite-framed languages)」に分類できると論じている。

(20)a. La botella entró a la cueva (flotando)
the bottle MOVED-in to the cave (floating)
"The bottle floated into the cave."
b. La botella salió de la cueva (flotando)
the bottle MOVED-out from the cave (floating)
"The bottle floated out of the cave."
c. La botella pasó por la piedra (flotando)
the bottle MOVED-by past the rock (floating)
"The bottle floated past the rock." (=Talmy 2000: 49-50)

(20) のスペイン語の例では、主語の *la botella* の移動と経路（入る、出る、通過する）が動詞で表現され、その事態に付随する様態（漂いながら）が分詞という副詞的要素で表現されている。これが動詞枠づけ言語の特徴で、ロマンス諸語、セム語族の言語、日本語、朝鮮語、トルコ語、タミル語、ポリネシア語、ネズ・パース語、カドー語がこれに当てはまる。これを図示したものが図3で、経路がこの事態の述語動詞に融合される一方、それに付随する様態や原因などは別の事態とみなされ、表現しようとすれば副詞的要素になる。

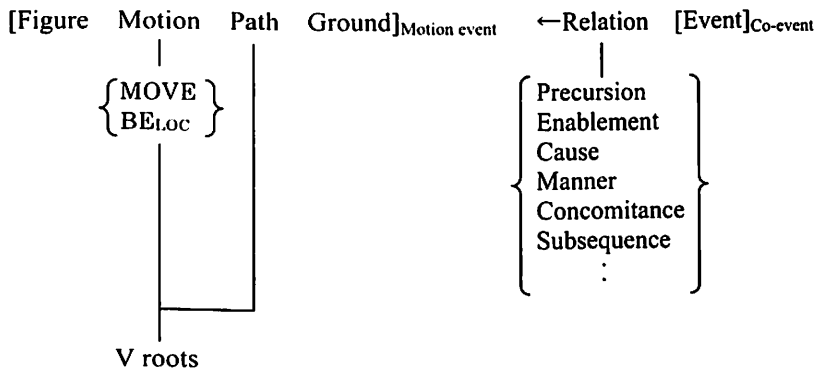

図3．経路が移動動詞に融合される動詞枠づけ言語（Talmy 2000: 49）

それに対応する英語の翻訳では、移動とその様態が動詞の部分で表現され、経路を表す情報は副詞的要素である前置詞句で表現されている。これは衛星枠づけ言語の特徴で、（ロマンス諸語以外の）インド・ヨーロッパ語族の言語、フィン・ウゴル語派の言語、中国語、オジブワ語、ワルピリ語などが含まれる。これを図示したものが図４で、この事態と何らかの関係（前触れ、原因、様態、付随など）にある別の事態が述語動詞に融合して表現される一方、経路は動詞の中では表現されず、もし表現されるなら副詞的要素になる。[*2]

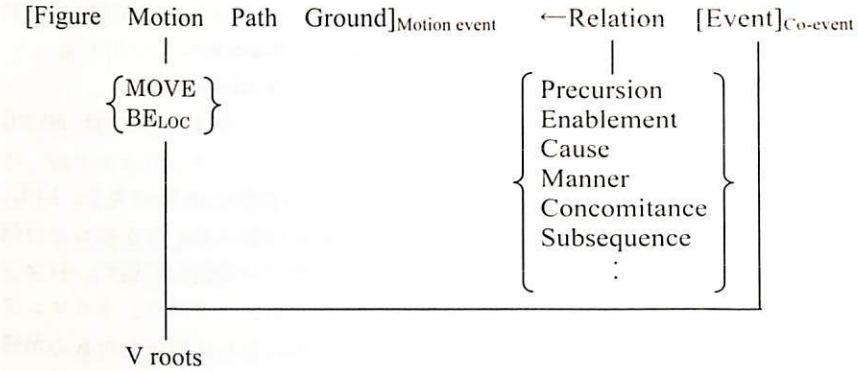

図４．付随する事態が移動動詞に融合される衛星枠づけ言語（Talmy 2000: 28）

3.2. 述語動詞と様態動詞との融合可能性

Talmy（2000）はまた、動詞がその意味を拡張させる過程を、その動詞本来の意味と異なる述語動詞との融合によって説明している。例えば *float* は物体が媒体によって浮遊している関係を示すもので、これを $float_1$ とする。そして移動を表す述語動詞 MOVE とこの $float_1$ が融合することで、「浮遊しながら移動する」という意味の $float_2$ という動詞になる。

(21) a. The craft $floated_1$ on a cushion of air.

b. The craft $floated_2$ into the hanger on a cushion of air.

c. The craft MOVED [$floating_1$ (the while)] into the hanger on a cushion of air.

↓

$floated_2$

（Talmy 2000: 31改変）

(21a) は飛行機が単に空中に浮かんでいる様子を表したものだが、(21b) は浮遊しながら格納庫へ移動したという意味になり、これは (21c) に表されるように *float*$_1$ が移動を表す MOVE という述語動詞と融合して生じた意味だと論じる。

しかしこのような融合は常に可能なわけではなく、動詞の特性によってどのような述語動詞と融合できるかに制限がある場合がある。

(22) a. The pen lay on the plank.
b. *The pen lay quickly down along the incline. (Talmy 2000: 33)
(23) a. *The canoe {drifted/glided} on that spot of the lake for an hour.
b. The canoe {drifted/glided} halfway across the lake. (ibid.、括弧は筆者)

(22a)(22b) の容認性の差は、*lie* という動詞が静的な状態を表す BE_{LOC} という述語動詞と融合できるが MOVE という動的な状態を表す述語動詞とは融合できないことを示している。(23a)(23b) からは逆に、*drift* や *glide* という動詞が移動を表す MOVE とは融合できるが静的な状態を表す BE_{LOC} とは融合できないことがわかる。

3.3. 英語の場所格交替に現れる動詞

(5)(6) で挙げた動詞を見てみると、どれも事態に付随する様態を表現していることが観察できる。(5b)(6a) の動詞はどのような光が発せられているか(どのような光り方をしているか)、(5c)(6b)(6d) の動詞はどのような音が発せられているか (どのような響き方をしているか)、(6c) は物質がどのような吹き出し方をしているか、(5a)(5d)(5e)(5f)(6e)(6f)(6g) は存在物がどのような様子であるかの、様々な様態を表したものである。3.1節で見たように、衛星枠づけ言語である英語の場合、主要な事態に付随する様態が述語動詞に融合される傾向があるため、これは不思議なことではない。

さらに、場所を主語にした場合の動詞は動的な意味を含まない。(5a)(6f) にある *dance* という動詞は、(7) の例のような通常の「踊る」という意味では交替を起こさず、(8) のようにその出来事が起こっている場全体の描写としてなら交替が可能である。同様に (5e)(6g) のリストにある *run* は、存在物の移動の意味では場所句交替を起こさない。

(24) a. People are running in the field.
b. *The field is running with people.
(25) a. Blood ran down his back.
b. His back ran with blood. (Salkoff 1983: 321)
(26) a. Gold runs in the streets of Eldorado.
b. The streets of Eldorado run with gold. (ibid.)

(24) のように人々の通常の移動を表現する場合には、場所を主語にした文型は不適格となる。しかし (25b)(26b) の *run* は、*his back* や *the streets of Eldorado* という場がどのような様子であるかを表現したもので、血や黄金が流れる様子をその場に広がる一種の模様のようにとらえている。3.2節で見た動詞の融合という考え方に基づくと、これらは本来 MOVE と結びつきやすい *run* という様態動詞が静的なもののあり方を表す BE_{LOC} という述語動詞と結びついて意味が拡張したものと考えられる。※3 (12b)(13b)(14b) の例でも同じことが起こっており、そのようなとらえ方が成立する限りにおいて、動的な意味を表しやすい動詞も場所格交替に現れることができると考えられる。

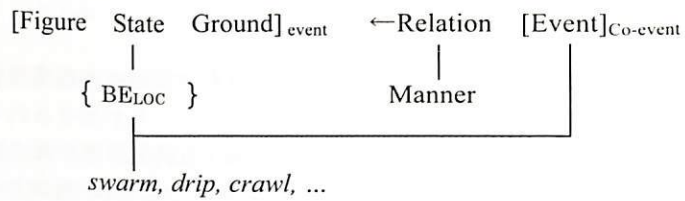

図5．衛星枠づけ言語における自動詞場所格交替（*with* 句を伴う文型）

3.4. 日本語の場所格交替に現れる動詞

(19a) にあるように、日本語では光の発生を表す動詞で自動詞場所格交替に生じるものはとても少ない。これは3.1節で見たように、日本語は動詞枠づけ言語であり、様態は動詞ではなく副詞節で表現されるため、動詞の部分に英語のようなバリエーションが生じる余地がないからである。

(27)a. The stars {twinkled/blinked/glared/flashed…}.
b. 星が {キラキラと／チラチラと／ギラギラと／ピカッと…} 光った／輝いた。

このような状況では、星は空を構成する一部分とみなされ、星が光ることがすなわち空が光ることであるので、日本語でも「光る」「輝く」という動詞が場所格交替に出現するが、交替する動詞の数では圧倒的に英語の方が多くなる。

次に、(19b) に挙げられている動詞はどれも、「容器としての場所」と「その中に大量に存在するもの」との関係性を表している。例えば「容器の容量」と「大量の存在物」の両方の概念がなければ「満ちる」という概念は成立しない。「存在物」「場所」どちらにも焦点を当てることができるため、場所格交替を起こすことは論理的にありうる。

では英語で交替を起こすその他の動詞が日本語では交替を起こさないのはなぜか。英語の動詞が意味拡張し交替を起こすのは、英語が衛星枠づけ言語であり、様態を表す動詞が静的な状況描写を表す BE_{LOC} と融合するためであった。一方、動詞枠づけ言語である日本語では英語のような融合が起こらず、動詞が本来持っている意味特徴がそのまま述語動詞に現れる。つまり英語の自動詞場所格交替で起こっているような意味の拡張は起こらず、そのため (4)(17)(18) で見たように、本来存在物の動作を表す動詞がその場所全体の様子を表すような静的な意味に拡張しないのだと考えられる。

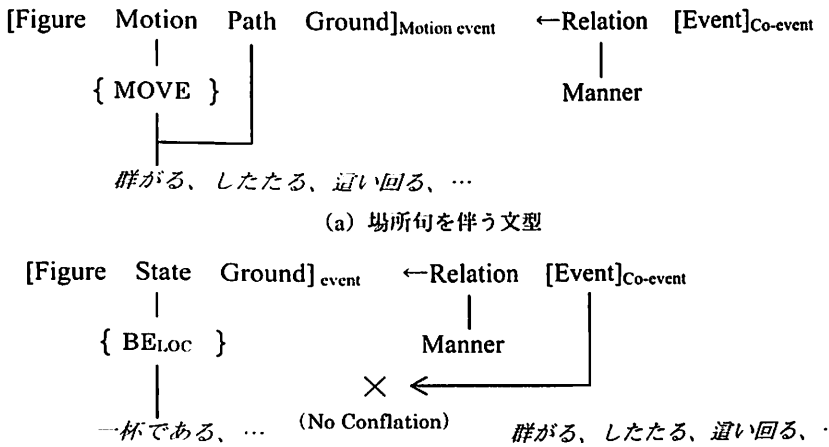

図 6．動詞枠づけ言語で様態を表す動詞が場所格交替を起こさない理由

4．結論

本論では Talmy（2000）の類型論に基づき、英語と日本語の自動詞場所格交替の容認性の差について考察した。衛星枠づけ言語である英語では、様態を表わす動詞がその事態の述語動詞と融合することで意味の拡張が生じ、本来存在物の動きを表わしていた動詞が、その場所全体の特徴を描写する動詞として使用できるため、比較的多くの動詞で自動詞場所格交替が生じる。一方動詞枠づけ言語である日本語ではそのような融合と意味拡張が起こらないため、自動詞場所格交替に生じる動詞は非常に限定される。

この議論に従えば、他の衛星枠づけ言語では英語と同様に多くの動詞が交替現象に生じるのに対し、他の動詞枠づけ言語では交替現象に生じる動詞は少ないと考えられる。この予測が正しいかどうか確かめるべく、今後調査を続けたい。

注

1．「音が鳴る」「お腹が鳴る」は同様の交替現象と思われるが、「?お腹で音が鳴る」「*お腹が音で鳴る」のように場所格や斜格を明示すると不適格になる。このような例は「光が（*信号で）点滅する」「信号が（*光で）点滅する」、「水が（*川で）流れる」「川が（*水で）流れる」など多数ある。本論文では文型として場所格や斜格が明示されていることを重視し、これらは考察の対象には含めない。

2．ただしこの分類は絶対的なものではない。衛星枠づけ言語に分類されている英語であっても、動詞 *die* や *kill* の意味には、明らかに事態の結末が含まれている。正確に言えば、「動詞枠づけ的な構文と共起する動詞が多い言語」「衛星枠づけ的な構文と共起する動詞が多い言語」ということになるだろう。

3．日本語では静的状態を表す BE_{LOC} の意味は「テイル形」で表現されることが多く、実際、場所格交替の斜格を伴う文はほとんどの場合「テイル形」になる。英語では *The building stood in front of us.* のように、進行形にしなくても静的な状態を表現できる。

参考文献

Anderson, John M. (1977) *On Case Grammar*, Humanities Press, Atlantic Highlands, New Jersey.

Anderson, Stephen R. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," *Foundations of Language* 6, 387－396.

Dowty, David (2000) "'The Garden is Swarming with Bees' and the Fallacy of 'Argument Alternation,'" *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*, ed. by Yael Ravin and Claudia Leacock, 111－128, Oxford University Press, Oxford.

Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case," *Universals in Linguistic Theory*, ed. by Emmon Bach and Robert Harms, 1－88, Holt, Rinehart and Wilson, New York.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar vol. II: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.

Langacker, Ronald W. (2002) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.

Morikawa, Fumihiro (2001) "Filled to Overflowing: A Study of Locative Alternation," *JELS* 18, 151－160.

Salkoff, Morris (1983) "Bees are Swarming in the Garden: A Systematic Synchronic Study of Productivity," *Language* 59, 288－346.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics vol. II: Typology and Process in Concept Structuring*, The MIT Press, MA.

山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』開拓社, 東京.

A Comparative Study of English and Japanese Verbs in Intransitive Locative Alternation

Fumihiro MORIKAWA

Locative alternation, or *Swarm* alternation, is a phenomenon where the same verb appears in two sentence patterns like "*Bees are swarming in the garden./The garden is swarming with bees.*" The locative phrase in the first sentence is "promoted" to the subject position in the second, and the subject of the former sentence is "degraded" to an oblique phrase with the preposition *with* in the latter. While about 350 verbs can appear in this type of alternation in English, it is only possible with about 10 verbs in Japanese. An example of this can be seen in the Japanese translation of the first pattern "*Mitsubachi-ga niwa-ni muragat-teiru.*" is acceptable, while the second pattern "**Niwa-ga mitsubashi-de muragat-teiru.*" is not.

This paper argues that this difference comes from the event-framing systems of the two languages. English is a satellite-framed language, so a verb expressing the manner of the motion can be conflated with the predicate of the sentence, which enables a wide variety of verbs to extend their meanings so that they can describe the state of the whole location. On the other hand, Japanese is a verb-framed language and does not have this kind of conflation system, so the verbs that describe the motions of the entities cannot extend their meanings in such a way. That is why, in Japanese, locative alternation is only possible with (i) verbs that describe the light emission and (ii) verbs that describe the relationship of fulfillment, which enable us to focus on either the location or the entities.